

戒律の唐招提寺 扉の花文様



百橋 明穂

どのはし・あきお 1948年、富山県生まれ。神戸大学教授・日本・東洋古代美術史。著書に『仏教美術史論』、共著に『列島の古代史5 専門技能と技術』など。

極彩色 イメージ覆す

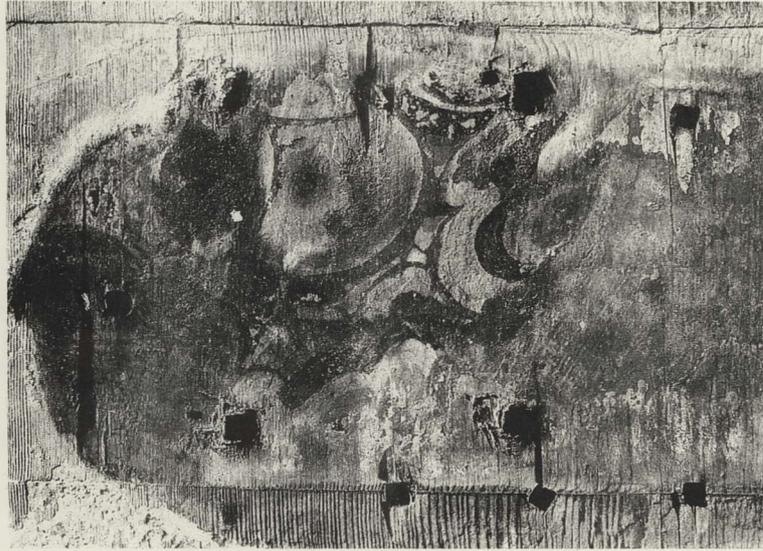
果、すべての扉には当初から種類
の宝相華が一段ずつ交互に描かれて
いたことが証明された。しかし、残
念ながら長年風雨にさらされてきた
正面扉のゆえか彩色の残るものはな
く、創建時の彩色復原は困難であっ
た。

奈良時代の寺院の堂塔の、しかも
正面外側の扉においては、彩色文様
が一般的だったわけではない。唐招
提寺より古い東大寺大仏殿正面の朱
塗りの扉には彩色文様はない。それ
は、平安時代末に兵火によって焼亡
する前の大仏殿を描いたとされる
『信貴山縁起絵巻』に描かれている
ので明らかである。

『七大寺巡礼私記』から知られてい
た。その記述から、唐招提寺の外の
扉にある蓮を凶化化した蜜絵は特記
されるものであったことがわかる。

の蜜絵」すなわち宝相華文様は、唐
招提寺の大きな特色であったことに
なる。朱塗りの扉に大きな宝相華文
がびしりと描かれる様は、戒律の

色鮮やかな朱色、橙色を呈する
発色のよい丹、やや赤紫色を帯びた
ベンガラと思われる輪郭線、顔料の
粒子もきれいな緑青、纏綿(同じ色
の濃淡を層状に繰り返す彩色法)を
なす宝相華の葉など、その鮮やかさ
は眩しいほどであった。



唐招提寺金堂の扉に取り付けられていた金具の
下から姿を現した創建当時の宝相華の彩色文様

金堂は、鑑真(688?~763
年)の在世時にすでにあったという
見解もあるが、多くは奈良時代末か
平安時代初めとする。鑑真の在世
時の特徴を示す彩色文様が発見され
たが、これは必ずしも金堂の建立時
期を早めるものではない。鑑真は中
国から日本に來朝した時(754
年)、多くの弟子や工人を伴ってき
た。彼らが鑑真の死後、師の故郷揚
州の寺院を再現すべく独自の努力を
傾けた結果であると考えたい。

寺として知られる質素なイメージと
は大きく異なり、豪壮・華麗な外観
であった。

宝相華文とは、蓮華文を中心に唐
草文と組み合わせる大きな団花文を
形成した現実にはありえない植物
で、想像上の装飾文様である。中国
唐代において発展し、やがて日本で
も奈良時代に大いに流行した。しか
もその彩色は西域風な纏綿や、寒色
系の青や緑、そして暖色系の赤に黄
(橙)、ないしは紫を組み合わせた
色彩対比豊かな豪華・華麗な文様
で、正倉院宝物の中に見出される。

新たに発見された扉上部の彩色文
様は、大山氏が明らかにした?種類
の宝相華文とはやや趣を異にしてお
り、その点でも注目される。扉に大
きく描かれた?種類の文様は宝相華
を平面的に捉えており、奈良時代末
期の傾向が強い。しかし、今回の宝
相華文は大きさも小さく、葉がうね
りや立体感のある異種な文様で、
むしろ奈良時代盛期(中期)の正倉
院宝物などに近い。色の組み合わせ
も、明度の高い華麗な色彩対比で、
盛期の特徴を示している。

官営工房である造東大寺司では、
東大寺大仏殿の造営や他の官立寺院
の造営に多くの工人や画師を大動員
して、堂塔内の彩色に当たったこと
が知られている。しかし、官立寺院
ではない唐招提寺の造営に関しては
不明な点が多い。

先年、奈良教育大学の大山明彦助
教授が、正面扉にある大きな団花文
(丸い花の文様)の風食跡に斜光線
をあてて、忍耐強くトレースした結